

会津若松城の悲劇

いくら我が身を守るためとはいえ、人命に係わる戦いを前提とする城の本質的な存在を私は否定したい。

時は福島県にある会津若松城の幕末の頃であった。江戸を無血開城した薩摩・長州の西軍は大軍を引き連れ、はるばる会津まで攻め入った。会津軍が降伏するまで、この場所は日本の歴史に残る最も悲惨な戦いが繰り返された。それが戊辰戦争であった。

この会津若松城（鶴ヶ城）は籠城約1か月に及ぶ西軍の激しい攻防戦にも耐え抜く天下の名城であったものの、城下のいくつかの武家屋敷では婦女子が自刀するなどの悲劇が続いた。更に会津藩士子弟で編成された白虎隊のほとんどは16～17歳の少年であった。攻防のなか辛くも西軍から敗走した20人は近くの飯盛山にたどり着いた。そこから目にしたのは砲煙に包まれた城下であった。少年たちは城が陥落したものと思い「主君に殉じよう」と、全員が若い命を自ら断ったのであった。

こうした悲惨な歴史より146年が経過した。会津若松城は3年ほど前に赤瓦葺替修繕工事が完了し、白虎隊も見たであろう国内唯一の赤瓦天守閣が甦った。そして博物館として、公園として、市の観光地のシンボルとして、更には多くの人たちの憩いの場として、大いなる社会貢献を果たしている。そして日本100名城に選定される文化財となった。



撮影 2014年夏

